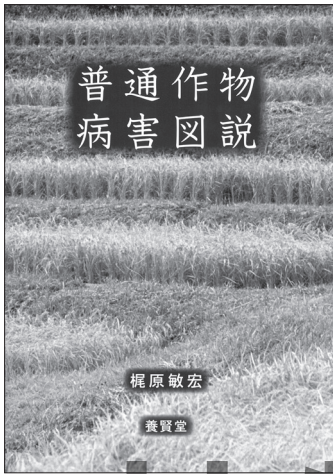


書評

普通作物病害図説
梶原敏宏著

B5判, 255頁, 本体12,000円+税
株式会社 養賢堂 (2016年5月20日発行)
(ISBN 978-4-8425-0545-9 C3061)



近年、公設試では組織改編や行財政改革による人員の削減が進み、中核となる研究員の減少とともに脈々と受け継がれてきた農業技術の伝承が困難になりつつある。したがって、今後の人材育成が喫緊の課題であり、植物防疫の場面においても例外ではない。

植物防疫にかかわる若い研究員や普及指導員が、常に農家から依頼されるのは病害虫の診断である。経験豊富な中核研究員ならすぐに解決できる問題であっても、若い研究員では、その被害が病害虫によるものなのか、薬害なのか、あるいは生理障害なのか区別がつかないことがある。私自身は若いころ、先輩に教えられて持ち込まれたサンプルの病徴を撮影して蓄積し、菌を分離して形態観察や病原性検定を行う等、診断業務の経験を積み重ねることができたが、今の時代では、的確に指導できる職員がいない場合も珍しくないという。

現在はインターネット環境が整備され、各種病害虫の情報も数多く入手できるようになるとともに、病害虫診断のための簡易キットが開発されている。しかし、現場で病害虫を的確に診断するためには、「紙媒体」の存在

はまだまだ重要と考えているのは私だけではないはずだ。的確な診断があつてこそ、病原特定のための簡易キットが効果的に利用できるのである。したがって、若い研究員や普及指導員にとっては、正確な診断を行うために必要な特徴的な病徴写真と病原の生態と防除法がコンパクトに整理された携帯可能な「紙媒体」の利用価値は高い。

本書「普通作物病害図説」は、1961年に出版された「原色作物病害図説」のリニューアル版である。初版から50年以上が経過し、植物病理学の進歩により各種ウイルス病をはじめ、多くの病害が記載され、情報が飛躍的に増加したことから、代表著者である梶原敏宏氏の専門であった普通作物（イネ、ムギ類、エンバク、アワ、ソルガム、トウモロコシ、マメ類、ジャガイモ、サツマイモ）の病害を対象として再編集されたものである。本書は、長年にわたり現場で活躍された梶原氏の情熱を感じさせる一冊となっている。また、各種病原や作物の専門家として、日比野啓行、本田要二郎、門田育生、門脇義行、児玉不二雄、大木理、東岱孝司、月星隆雄、植松勉の錚々たる諸氏が共同著者として名を連ねているのも大きな魅力である。そして、本書には病徴や圃場の被害写真、病原ウイルスや糸状菌の分生子の形状写真等が豊富で、病原の生態や防除法が書かれているので、現場で活用するのはうってつけである。

最近、茨城、栃木、埼玉を主とする北関東の一部では、1990年代以降しばらく沈静化していたイネ縮葉枯病が再び猛威をふるい始めた。公設試や普及センターでは、職員が世代交代してしまい、本病を見たことのない職員が大多数を占めるようになっていたのである。本病が再流行した原因は明らかになっていないが、温暖化を主とする気象条件、地域で導入される作目や品種、栽培型などの耕種条件によって、過去に発生した病害がいつ復活しても不思議ではない。本書には過去に発生したが現在はあまり見られなくなった病害も掲載されており、大変貴重である。

若い研究員や普及指導員のみならず、普通作物の植物防疫にかかわる方々には是非本書を活用されることをお勧めしたい。

(茨城県農業総合センター農業研究所 渡邊 健)